

グローバル・コミュニケーション研究所紀要  
『グローバル・コミュニケーション研究』

執筆要項

2023年7月改訂

1. 原稿の書式・分量

- ① 日本語で書く場合：原稿はA4版用紙横書き（33字×30行）で、25ページを上限とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量に含める。論文タイトル（和文・英文）、著者氏名・所属機関（和文・英文）、英文の要旨200語程度、キーワード（日本語3～5語程度）を添える。
- ② 英語で書く場合：原稿はA4版用紙横書き（32行）で、25ページを上限とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量に含める。論文タイトル（英文）、著者氏名・所属機関（英文）、論文要旨（英語200語程度）、キーワード（英語3～5語程度）を添える。

2. 本文について

- ① フォントは和文にはMS明朝、欧文にはTimes New Romanを使用する。数字は算用数字（半角）を用いる（例：第1章、2つ、3人）。
- ② 文字サイズは、和文10.5ポイント、欧文12ポイントとする。
- ③ 和文の句読点には「、」「。」を用いる。
- ④ 章と節の記号を付ける場合は、章は「1.」、「2.」・・・、第1章第1節は「1.1.」のようにして、ゴシック体を使用する。
- ⑤ 著書、雑誌などのタイトルには、和文の場合は『 』、欧文の場合はイタリック体を、論文タイトルには、和文の場合は「 」、欧文の場合は“ ”を使用する。
- ⑥ 引用文の短いものは、和文の場合「 」、欧文の場合は“ ”で括る。長い場合は左2文字下げ、本文との間に各1行のスペースを空ける。いずれの場合も、出典は引用後に以下のように示す。  
田中（1997）によれば…  
Blommaert（2010）によれば…  
～である（鈴木、2000:120-121）。  
～という（Blommaert, 2010:13）。  
～である（Rampton, 2005; Blommaert, 2010）。  
～という（Denzin, 1989; 桜井、2002）。  
なお、出典のみを明示する場合は、注ではなく本文で明示する。
- ⑦ 図表は希望する箇所に番号を振って挿入すること。図表上部には登場順の番号とタイトルを、図表の下部には出典を必ず書くこと。カラーの図表であっても、印刷時には白黒となることを了承されたい。写真も図表扱いとする。

3. 注について

- ① 注は脚注とする。通し番号を付け、本文の該当箇所の右肩に上付きで<sup>り</sup>のように示す。句読点（欧文ではカンマとピリオド）がある場合には、その直前に置く。
- ② なお、注の多用を避け、本文で内容を示す。

4. 参考文献について

- ① 参考文献は論文末尾に一括し、本文の終わりから1行空けて始める。「参考文献」の表記はゴシック体にする。
- ② 最初に和文文献（著者名五十音順）、次に欧文文献（著者名アルファベット順）を書く。
- ③ 体裁は以下のようにする。

- (1) 和文単行本 (単著、共著、編著)

青木保 (2003) 『多文化世界』 岩波書店  
河原俊昭・山本忠行共編 (2004) 『多言語社会がやってきた：世界の言語政策 Q&A』 くろしお出版  
古田暁監修、石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1987) 『異文化コミュニケーション』 有斐閣  
山田高敬・大矢根聡共編 (2011) 『グローバル社会の国際関係論 新版』 有斐閣  
山本真弓・臼井裕之・木村護郎クリストフ (2004) 『言語的近代を超えて：多言語状況を生きるために』 明石書店  
Yamamoto, M., H. Usui & G. C. Kimura (2004) *Gengoteki Kindai o Koete: Tagengo Jokyo o Ikiru Tameni*. Akashi Shoten.
- (2) 和書編著書に収録された論文  
広田康生 (2001) 「多文化化する学校・地域社会」 駒井洋監修・広田康生編『多文化主義と多文化教育』 明石書店、15-33 頁  
服部範子 (2012) 「強勢のバリエーションをとらえる」 日比谷潤子編『はじめての社会言語学』 ミネルヴァ書房、176-189 頁  
Hattori, N. (2012) Kyosei no barieshon o toraeru. In Hibiya, J. (ed.), *Hajimete no Shakai Gengogaku* (pp.176-189). Mineruva Shobo.
- (3) 和文論文  
田崎敦子 (2007) 「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響：多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に」『異文化コミュニケーション研究』 19 号、85-99 頁  
山田富秋 (1999) 「エスノメソドロジーからみた「言語問題」」『社会言語科学』 2 巻、1 号、59-69 頁  
Yamada, T. (1999) Esunomesodoroji kara mita “gengo mondai”. *Shakai Gengogaku*, 2(1), pp.59-69.
- (4) 翻訳書  
ラフェリエール、ダニー (立花英裕訳) (2011) 『ハイチ震災日記』 藤原書店  
アウンサンスーチー (土佐桂子・永井浩訳) (2012) 『ビルマからの手紙 増補復刻版』 毎日新聞社  
ガンパーズ、ジョン (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳) (2004) 『認知と相互行為の社会言語学：ディスコース・ストラテジー』 松柏社
- (5) 洋書単行本 (単著、共著、編著)

Brown, P. & S. Levinson (1987) *Universals in Language Use: Politeness Phenomena*. Cambridge: CUP.  
Fishman, J. (ed.) (1974) *Advances in Language Planning*. The Hague: Mouton.  
Laponce, J. A. (1993) *Languages and Their Territories*. Toronto: Toronto University Press.
- (6) 洋書編著書に収録された論文  
Haugen, E. (1983) The implementation of corpus planning: theory and practice. In Cobarrubias, J. & J. A. Fishman (eds.), *Progress in Language Planning* (pp.269-289). Amsterdam: Mouton.
- (7) 欧文論文  
Poplack, S., J. Walker & R. Malcolmson (2006) An English “Like no other”? language contact and change in Quebec. *Canadian Journal of Linguistics*, 51, pp.185-213.  
Gnutzmann, C., J. Jakisch & F. Rabe (2014) English as a lingua franca: A source of identity for young Europeans? *Multilingua*, 33 (3-4), pp.437-457.

(8) 学会などでの発表

松岡洋子 (2016) 「移民の言語能力への期待：移民と受け入れ社会の差異に着目して」『日本語政策学会第 18 回大会予稿集』 44-46 頁

横森大輔 (2015) 「やりとりの中の記号・認知・文化」『社会言語科学会第 36 回大会発表論文集』 190-191 頁

Shikano, M. (2013) Japanese school-aged children crossing national and cultural borders: Returnees' re-integration. Paper presented in the 9th International Symposium on Bilingualism.

(9) インターネット上の資料の引用

独立行政法人日本学生支援機構 (2016) 「平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果」独立行政法人日本学生支援機構、2016 年 3 月発表

[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2015/index.html/](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html/) (2016 年 11 月 3 日閲覧)

Public Opinion Programme, The University of Hong Kong. (2013) *People's ethnic identity [Data file]*.

Retrieved from <http://hkupop.hku.hk/english/popexpress/ethnic/index.html/> on August 28, 2017.

- ・ 和文文献で著者が外国人名の場合、ファーストネームとミドルネームをイニシャルにする。
- ・ 欧文文献で著者が複数いる場合、第一著者は「姓 (スペルアウト), 名 (イニシャル)」とし、第二著者からは「名 (イニシャル) . 姓 (スペルアウト)」の順にする。
- ・ 和文文献のタイトルに副題がある場合、「ー」ではなく「:」を使用する。
- ・ 英語論文の場合、和文文献はローマ字表記にする。

以上